

平成元年 1989年 創刊 No.430

月刊ウィーン

GEKKAN-WIEN 2026年2月号



杉本純の原子力の話 II

ウィーンと京都 No.163

日本学術会議 総合工学委員会 原子力安全に関する分科会の主催による「原子力総合シンポジウム2025」が、1月19日に日本学術会議講堂とオンラインにて開催された。同シンポジウムは、我が国の原子力について総合的な議論を行う場として、これまで50年以上にわたり開催され、日本学術会議と日本原子力学会等の多くの学協会の協力の下で、各界の識者を交えて、中長期的な視点から議論を積み重ねてきた。

今年度は、原子力プラントの安全性向上と持続的な活用のために必要となる総合的な技術、多様なステークホルダーをつなぐコミュニケーション、並びに国内のみならず国際社会との連携を図るためのマネジメントシステムの基盤として、人材の確保と育成の課題に焦点をあて、産業界・政府・教育機関・国際機関等の技術者、教育者、研究者を中心としてオンラインを含めて約300名の参加があり、筆者も対面参加した。

関村直人氏（日本学術会議連携会員／東京大学名誉教授）による開会挨拶に続いて、小野恭子氏（日本学術会議連携会員／産業技術総合研究所）の司会により、「ALPS処理水の海洋放出の影響評価と課題」と題する分科会活動報告が森口祐一氏（日本学術会議第三部会員／東京大学名誉教授）および津旨大輔氏（筑波大学教授）よりあった。引き続き、森口氏をコーディネータとして、飯島和毅氏（日本原子力研究開発機構）、鈴木達治郎氏（長崎大学客員教授）、一ノ瀬正樹氏（日本学術会議連携会員／東京大学名誉教授）、および中西友子氏（日本学術会議連携会員／東京大学名誉教授・特任教授）がコメンテータとなって総合討論が行われた。分科会が取りまとめ中の見解（案）は概ね妥当であるとのコンセンサスが得られた。

午後からの「原子力分野の人材基盤と育成について」と題するセッションにおいて、「招待講演1」では、岩城智香子氏（日本学術会議連携会員／東芝総合研究所／東京科学大学特任教授）の司会により、増井秀企氏（日本原子力産業協会理事長）から「原子力産業における人材確保・育成の取り組み」と題する講演があった。人口減の中で仕事が増えている状況下で個別取組の連携と総合化の重要性が強調された。次に小崎完氏（北海道大学教授）から「日本原子力学会およびANECにおける原子力人材育成」と題する講演があった。今後の方向として、研修修了証のデジタル化や簡便化について興味深い紹介があった。「招待講演2」では越塚誠一氏（日本学術会議第三部会員／東京大学大学教授）の司会により、上坂充氏（原子力委員会委員長）から「世界の中の日本の原子力人材育成」と題する講演があった。「レーザーなどの原子力分野でわが国からノーベル賞を！」との訴えが印象に残った。続く山中伸介氏（原子力規制委員会委員長）から「原子力規制における人材育成」と題する講演があった。多くの大学と協力して規制に関する人材育成事業を展開していることが報告された。

続く「特別講演」では、関村直人氏の司会により、ウィリアム・D・マグウッド四世（経済協力開発機構／原子力機関（OECD/NEA）事務局長）から、「OECD/NEAにおける人材育成に関する活動」と題する講演があった。近年はダイバーシティー関連で女性の原子力科学者・技術者を育成するプログラムがいくつかあることが紹介された。引き続き、関村直人氏をコーディネータとして、増井秀企氏、小崎完氏、上坂充氏、山中伸介氏、足立文緒氏（国際連合工業開発機関東京投資・技術移転促進事務所所長）、および室谷展寛氏（OECD/NEA事務局次長）がコメンテータとなって総合討論が行われた。産業界における実務や規制機関や国際機関における人材育成、大学における高等教育のあり方等について、福島第一事故教訓の継承、最近の原子力界の不祥事、日本人の国民性なども含め、幅広い観点からフロアも交えて当初の予定より30分も超過して熱心な討論が行われた。最後に越塚氏より閉会の挨拶があった。わが国の原子力人材育成に関する産官学の専門家とOECD/NEAのトップが一同に会したことにより、内容に深みと広がり、それに国際性のある爽やかなシンポジウムだと思った。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の2月のイベントを紹介したい。ウィーンでは、2月が一年で最も華やか「舞踏会の季節」となる。19世紀の宮廷文化を起源とする舞踏会は、やがて市民社会へと広がり、現在では冬の社交文化を象徴する行事として定着している。数多くの舞踏会の中でも、大統領が主催する国立歌劇場舞踏会（オーパンバル）は特別な位置を占める。この舞踏会では、白いドレスとティアラに身を包んだ若い女性や男性が社交界へ正式に紹介されるデビュタントの儀式が行われる。これは単なる若者の晴れ舞台ではなく、礼儀作法や社会的責任を受け継ぐ象徴的な通過儀礼でもある。音楽と舞踏、秩序だった所作を通じて、ウィーンは都市としての文化的連続性を今に伝えている。

一方、京都では2月は「節分」を中心とする行事の季節である。節分は立春前日に行われる季節の境目の儀礼で、災厄を祓い、新たな時間へと移行する意味をもつ。京都では八坂神社や壬生寺など各地で節分会が営まれるが、なかでも吉田神社の節分祭は平安時代にさかのぼる由緒を誇る。追儺式と呼ばれる古式の儀礼では、鬼を追い払う所作を通して、目に見えない穢れや不安を共同体から遠ざける思想が表現される。例年約50万人の参拝者が訪れ、境内は多くの露店と厄除祈願やくちなし色の御神札を求める参拝者の人波で埋め尽くされる。人々は豆をまき、祈りを捧げることで、新しい季節を迎える心の準備を整える。節分は京都において、都市全体が一体となって「区切り」を意識する重要な歳時記である。

ウィーンの舞踏会が音楽と身体表現によって社会の秩序と継承を祝うのに対し、京都の節分は祈りと儀礼を通じて時間の転換を受け止める。形式は異なるものの、いずれも2月という節目に、人々が立ち止まり、過去から未来へとつながる文化の流れを確認する行事である。華やかな舞踏と静かな祓いという対照の中に、両都市が育んできた精神の深層が静かに映し出されている。

余談であるが、筆者は大学で原子力人材育成を担当していることもあり、上述のように当シンポジウムに参加して2件質問をした。ウィーン駐在時の現地採用女性事務員は、ウィーン大学在学中に頼まれて3年連続デビュタントを勤めたと聞き驚いた。IAEA(国際原子力機関)が主催する舞踏会に1度だけ参加した。着物を含む各国の民族衣装が華やかだった。京都では大学が吉田神社の直ぐ近くなので、節分祭には多くの人並みに遭遇した。今度も両市の2月のイベントを紹介することができた幸運に感謝しつつ、オーパンバルのデビュタントの写真を掲載させていただく。

杉本純（東京科学大学特任教授 元京都大学教授 元原子力機構ウィーン事務所長）

